

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	5
瑠璃集	10
瑪瑙集	19
紅玉集	21
五月号月評	22
総合誌の窓	24
恵贈句集拝見	26
特別作品	28
他誌掲載より	30
琥珀集作品鑑賞	32
瑠璃集作品鑑賞 I	33
II	34
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	35
俳誌交歓	37
妣の国父の蒼天(2)	38
枚岡梅林と石切神社吟行	40
追憶の北京	42
田螺の恨み	43

今月の一句

五月雨を木曾の余韻に石畳 桂 樟蹊子

昭和六十一年、師の木曾路の旅の結びの句である。島崎藤村の筆による道しるべ「これより木曾路」を西へ過ぎると、木曾路続きの中仙道に入る。「木曾路を馬籠峠から下つてきた気負いに、余韻のように聞こえたのは石畳を打つ雨音だった」と作者の言葉にある。旅を好まれた師の溢れる叙情句、名詞と助詞のみを使われた句を読み返し新しい感懐を覚えた。

隆子

始祖鳥

塩路隆子

春の湖下知待つ鴨の羽繕ひ
尾のとれて蝌蚪に芽生える自立心
山椿翼あるもの潜ませて
昨日より少し陽気な春の月
始祖鳥に付き纏はるる春の夢
とどまらず急がず春の水車かな
鳴かぬなら鳴かせむ鶯餅ふたつ
おぼろ夜の視覚聴覚ゆるびけり

五月号光耀抄

塩路 隆子選

木曾甚句流す関跡春しぐれ
朝刊の棋譜のどかなり逆さ文字
背山よりをさな声して匂ひ鳥
啓蟄の関西遠しまた近し
嬰の重みのこる腕の暖かし
チベットは今も鳥葬霾れる
観音の瓔珞揺るる花の風
春眠し環状線をふた周り
寒ざくらの野辺に天使のドレス色
うららかや木喰佛へおんかかか
行く春の山一斉に葉の怒涛
身の内の声に素直や草の餅
将来は花嫁きぼう卒園児
のどかなり雲影負うて野良の人
春の山やま彦に逢ふところまで

坂上 香菜
北尾 章郎
杉本 綾
森下 康子
鈴木 照子
田下 宮子
小林 成子
塩路 五郎
伊東 和子
伊藤 憲子
岡 佳代子
小澤 菜美
藤見佳楠子
増田 一代
松岡 和子

長閑なり瀟洒な午後のハーブティー

思ひ出のどか弁いづこ卒業期

山峡の長き葬列帰雁どき

雛の唄流す参道七曲り

語り部のまろき口調やちゃんちゃんこ

春繚乱謳歌叶はず花粉症

春寒や振り子動かぬ鳩時計

味噌煎餅商ふ媪春火桶

潮騒の響く札所や落つばき

水に添ひ水に逆らひ春の鴨

梅東風の酒宴筵や日差追ひ

デパ地下に殿方ふらり菜種梅雨

金平糖ガラス小皿の春日かな

初もののほたる烏賊なり酔味噌味

ふらここや雲に乗らむと大地蹴る

春風をうけて颯爽バイク夫

整髪の椅子にまどろむ春の昼

小道具の揃はぬ母の雛飾る

弥陀の手に抱かるる心地げんげ畑

三川美代子

宮田 香

中川すみ子

竹内 悦子

粟倉昌子

山本 孝夫

能勢 栄子

笠井 清佑

坂根 宏子

笹田 浩朗

杉野原弘幸

鷺見多依子

片岡久美子

桂 敦子

紀川 和子

池田加寿子

宇治 重郎

奥村佐栄子

前川ユキ子

禅味ある絵はがき届く春立つ日

風拂る緋裏華やぐ春コート

桃色に色づく空気ヒヤシンス

春一番わがまほろばを逸れて過ぎ

春嵐アラビアータを選ぶ店

荒星の貼りつく玻璃戸冴返る

寝姿の優しき春の東山

哲学の道の漫ろや水ぬるみ

尖りたるころを撫づる春の風

桜餅買ふ不届きや喪のかへり

はり紙に入荷しました瀬田蜷

城崎の慣れぬ下駄ばきささめ雪

連翹の黄色地を這ふ武家屋敷

春昼や香車軽々直進す

紙雛に心づくしのごもく寿司

ことりさんキンカンたべておいしそう

うめの木にひっかかったよバドミントン

つくしんぼまるいぼうしののつぼさん

黄砂降りフロントガラスくもらせる

和田 郁子

山口キミコ

山崎 里美

横田 矩子

吉田 希望

吉田 晴子

松田 和子

松田とよ子

水船みどり

宮崎左智子

森永 洋子

藤本 秀機

西田 史郎

常田 創

三原 利枝

森下ちさと

塩路 彩奈

広瀬 結麻

高野 綸

琥珀集

春田打

北尾章郎

四温晴風の方向音痴かな

蘇る田の脈絡や畦青み

朝刊の棋譜のどかなり逆さ文字

自画像の化粧直しや寒の紅

如月や塾送迎を買うて出る

白酒や姥哀調の子守唄

孫帰農決めしと老の春田打

春時雨

坂上 香菜

木曾谷や濁り激しき雪解川

木曾甚句流す閑跡春しぐれ（福島宿）

山頭火詣でたる墓花馬酔木（旭將軍義仲の墓）

「夜明け前」舞台の馬籠梅白し

墓前にて「初恋」唱和のどかなり（藤村の墓）

弊辛夷匂ふ美濃路や芭蕉句碑

初蝶来落合宿へ山路越え

山笑ふ

杉本

綾

背山よりをさな声して匂ひ鳥

団欒は遠き日のこと花を待つ

風光るブロンズ少女天を指し

なごやかな雀の一家日向ぼこ

浅春の月中空に檸檬いろ

愛飲のローヤルゼリー山笑ふ

一盛りの若布懐し故郷の香

ワンコイン

森下 康子

鳥葬

田下 宮子

イケメンの天気予報士花便り

ひとり居のわが身の軽さ春シヨール

七三の髪逆立てり涅槃西風

啓蟄の関西遠しまた近し

納税期パソコン入力完了す

ワンコインで春の香りのスパゲティー

彼岸会にマスク一族集ひけり

小さき傘

鈴木 照子

春雷

塩路 五郎

登園の小さき傘や木の芽雨

兎のふいに駈け出す速さ風光る

嬰の重みのこる腕の暖かし

ベランダを侵犯ロシア猫の恋

メールして乗り越す駅のおぼろなり

公園に砂のトンネル日脚伸ぶ

梅東風やジャージーの背に送球部

春愁やザビエル塔の鐘渉り

教会のモダン建築風光る

春宵やタップダンスの燕尾服（ホテルのシヨール）

白狐伝のこる温泉町の夕おぼろ（山口）

春夕焼天草灘の船染めて

チベットは今も鳥葬霾れる

内定を取り消されたる春憂ひ

春雷に阿修羅眼光威を増せる

霾りて故宮へ旅のプランかな

街道の家並に競ふ枝垂梅

春愁や旧き日を恋ふ埴輪の目

春眠し環状線をふた周り

天平の礎石を掠め初燕

光明を見出す花菜明りかな

だつたん帽

盆梅展緋の毛艶の苞ほう払ふ

女人高野花の天蓋くぐりけり

ひとり居の日差しに納め馴染雛

きき酒や新酒の銘の八重桜

観音の瓔珞揺るる花の風

白梅の影を踏みたり筆の塚

だつたん帽いたたく嬰の頬赤し

小林 成子

おんかかか

伊藤 憲子

控へめに白梅咲けり狭庭にも

はがれさうただいぢらしき梅の白

芽吹く山白馬のやうな雲を生む

茅かや葺の里の水銃つづ犬ふぐり

街路樹の春待つ拳力あり

うららかや木喰佛へおんかかか

天井の龍の目きらり春の雷

寒桜

伊東 和子

葉の怒涛

岡 佳代子

春嵐に追はれての旅岬の宿(犬吠岬二句)

灯台へ春一番の浪攻める

風の音止みし幽けさ地虫出づ

寒ざくら野辺に天使のドレス色

にはたづみ春の雲ある雨あがり

寒明ける口中の飴すぐに溶け

霞みつつ地球が丸く見える丘

行く春の山一斉に葉の怒涛

晴るる日の百花に群れる春の禽

せせらぎを跳びて園児ら土筆摘む

春寒し思はず衿を合はしけり

礼状に内の一字や春日和

春眠やテレビ消されて目覚めたる

顔ぢゆうに無精髭ある恋の猫

蘆の角

小澤 菜美

のどかなり

増田 一代

思ひ出は持たずひらひら鳥帰る

老人ホーム彼岸桜の優しさよ

蘆角や映る茶室の佇まひ（樂吉左衛門館）

高層の灯ともし頃や湖おぼろ

霾れり不気味な国と一つ宙

青饅や夕餉相手に子の来る日

身の内の声に素直や草の餅

貝合せ

藤見佳楠子

春の月

松岡 和子

将来は花嫁きぼう卒園児

ままごとの叱る仕種や母子草

微酔へば在所の言葉雛の膳

ふくよかな人形塚へ桃の風（室鏡寺人形展四句）

杉戸絵の応挙の子犬長閑なる

百々御所の人形展や貝合せ

代々の雛面輪違へて華やげる

黒潮の涛のうねりや春風

廃屋となりたる宿やなごり雪

紀の国に一足早き山桜

のどかなり雲影負うて野良の人

新築の学舎を飾る花ミモザ

龍の目の妖しき光春寒き

若木よりなほ華やかに古木梅

蒲生野に降りて来さうな春の月

春の山やま彦に逢ふところまで

夕厨煮くづれ早き春大根

履歴書の行間にある春愁ひ

ここよりは通行止めよ落椿

ふるさとの土少し付け春大根

聞き役に徹する夜やもどり寒

春の雪

三川美代子

長閑なり瀟酒な午後のハーブティー

川堤行けば満ちをり春気配

蒼天へ漲る力辛夷の芽

梅の里猿出没の掲示板

ポストまで傘に重たし春の雪

憚りのあらふことかに恋の猫

湖西線またも遅延の春疾風

大試験

宮田

香

恋猫の悲痛な叫びロミオかな

恋の猫昨夜の情熱おくびにも

啓蟄や轍一条猫車

女兒生るる旧家や桃の花盛り

魁けて季を満喫花菜和

思ひ出のどか弁いづこ卒業期

「大安」に力を得たる大試験

春雷

中川すみ子

イヤホーンの流れのどかや美術館

春雷に方向音痴露顕せる

近江富士の裾野煙れり春浅き

諸子釣自立芽生えし男の子かな

山峡の長き葬列帰雁どき

鹿ヶ谷峰起のさまに露の臺

立雛と交はず暗黙ひとり刻

雛の唄

竹内

悦子

雛の唄流す参道七曲り(石切)

比良の雪解けて潤ほふ近江かな

リストラの人との別れ春動く

梅の花不況がゆ糸の神頼み

記憶にも春昼倦まぬ百度かな

観梅にはぐれ狸のご愛嬌

春めくや神に頼みし旅の無事

瑠璃集

ちゃんちゃんこ

粟倉 昌子

雪宿に灯の点りゆく夕間暮れ
語り部のまろぎ口調やちゃんちゃんこ
雪覆ふまたぎの村の無音界
雪晴間出羽三山の緩びなき
鳥海山ちゅうかいの雪の雄姿や日本海

花粉症

山本 孝夫

春繚乱謳歌叶はず花粉症
ひいふうみい春の車内のマスクかな
春の闇百の嚏を繰り返す
軽便になる筈なのに花に病む
杉花粉飛散の報やブルーデー

春めく

阪本 哲弘

贗作のモネを飾りて冬ごもり
ナースらに転勤のあり梅二月
闇汗に声の大きな男かな
不機嫌に「出来た」の一語大試験
春めくと言ふ予報士の紅淡し

春寒

能勢 栄子

春寒や振り子動かぬ鳩時計
春愁や媪の記憶とぎれ勝ち
ぼたり落つ深山椿や溪深き
隣り家は豪華絢爛雛の段
幼な子の掌よりはみ出す櫻餅

下萌

笹井 康夫

老どちのむかし語りや梅日向
巖然と天保薨や風光り
下萌や足投げ出せば日の温み
菜の花に展げる湖の白帆かな
木漏れ日を淡々まどふ節分草

五月号月評

塩路 隆子

「瓊」の目指すところは矢張り芭蕉の目指した「さび・しおり・ほそみ」の世界と認識を新たにしている。句会では時々触れているが、それらに加えて「不易流行」を詠み込むことである。今月もそれに添った評をして行きたい。

木曾甚句流す関跡春しぐれ

坂上 香菜

甚句とは七・七・七の四句からなる代表的な日本の民謡であり、地方の盆おどりとして親しまれている。木曾福島で得られた一句である。福島宿は中山道の木曾二十四宿の一つの宿場町として発達、いまも当時を偲ばせる旅籠や関跡などが保存されている。山深い木曾は春になっても時雨が多い。関跡を訪れた作者は時雨のなかで折りしも流されている「木曾甚句」を聞きながら、特に女改めの厳しかったこの関所の往時を偲んでいる。関跡という動きの無いものに、甚句の声と、時雨による太陽の照りかげりをうまく配置された。

朝刊の棋譜のどかなり逆さ文字

北尾 章郎

作者は何時も洒脱な句を発表される。朝刊をよくひとよって一日が始まる人が多いが、作者もその通りようである。特に将棋に興味のある作者はまず棋譜へ目が行く。攻めと守りを一度に表示してある棋譜は、どちらかが逆さ文字になっている。天気がよく、うらうらとした日の穏やかなさまを「のどか」と表現し、春の時候の季語としているが、この句は心象的なものを含めての「のどか」であろう。棋譜を詠んだ句も珍しい。いい素材を見つけられた。

うららかなや木喰佛へおんかかか

伊藤 憲子

江戸後期の遊行僧、木喰五行（もくじきごぎょう）は晩年に千体佛の造像を発願、各地を遍歴して日本全土に特異な木彫佛を残している。丸みの多い曲線的な表現と、柔和な微笑が特徴である。うららかな春の日、作者は木喰佛へお参りをされた。合掌されたときに思わず口に出た言葉は「おんかかか」。作者はお坊さんのお経のなかで頭に残ったのはこの音で、実際にこの言葉があったかどうかとも分らないという。まろやかな木喰佛の微笑と彫の素材のなかの豊かさ、「うららかな」「おんかかか」の措辞の調和、いい作品である。

(以下略)